

ヨハネ福音書は1章に続いて、本日のテキストで再び洗礼者ヨハネのことを取り上げます。紀元後28年の夏あたりにイエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けました（マルコ福音書1章9節）。洗礼者ヨハネは、エルサレム郊外の山里で父ザカリアと母エリザベトの間に生まれました。おそらく、紀元の変わり目当たりの時期で、アルケラオがユダヤ地方の民族統治者として治め始める前後の頃だと思われます。父ザカリアは24組ある祭司の中のアビヤ組に属する下級祭司でした。洗礼者ヨハネはティベリウス皇帝の治世の15年目（ルカ福音書3章1節）である紀元後28年頃に洗礼活動をする預言者として荒れ野でデビューしました。彼が30歳から35歳ぐらいの年齢の時です。

街中ではなく、荒れ野で生活をしながら、パレスチナ地方を南北に流れるヨルダン川のほとりで預言者として活動していました。彼のもとに集まる民衆を川の水に頭まで浸す洗礼という清めの行為を行っていたので、洗礼者という呼び名が付けられていたのです。洗礼者ヨハネの教えに共観したからこそイエスは彼から洗礼を受けたのです。ヨハネの教えの内容は、マタイ福音書とルカ福音書にその詳細が記されています

『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結べ。』我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちをつくり出すことができになる。私はあなたがたに水で洗礼を授けているが、私よりも力ある方が来られる。その方は聖霊と火でああなたがたに洗礼をお授けになる』（ルカ福音書3章7〜8節、16節。マタイ福音書3章11節）。おそらく、そのようなことを言って水で洗礼を授けていたのです。

さらにマルコ福音書は洗礼者ヨハネの活動を『罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた』（1章4節）と要約しています。これらの記述からわかる洗礼者ヨハネの教えの特徴は、終末の到来に備えることと、罪の赦しにつながる悔い改めを象徴する洗礼を受けることを促していたことです。イスラエルの伝統的な考えによれば、罪の赦しは神殿で犠牲祭儀を通して保障されていたのです。ですから、洗礼者ヨハネの洗礼活動は、神殿祭儀を相対化するものであったのです。エルサレムの神殿祭儀に距離を取ったヨハネの姿勢はどのようにして生まれたのか。おそらく、父ザカリアが山里に住む下級祭司であり、大祭司一族の拠点となっていた神殿の在り方に疑問を抱いたとしても不思議ではありません。

そして洗礼者ヨハネにとって重要なことは、預言者エゼキエルの『わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる』（36章25節）と語っていることを重視していたと思われます。終末においては、神の霊が民に注がれるという約束を預言者エゼキエルは語っているのです。このようにみると、洗礼者ヨハネが『私よりも力ある方が来られる。その方は聖霊と火でああなたがたに洗礼をお授けになる』とエゼキエルの言葉を想定して語っていたことがわかるのです。

イエスが『時は満ち、神の国は近づいた』という終末的なスローガンをもって活動を始めたのですが、これは洗礼者ヨハネと同じ地平にイエスがいたことを示しています。洗礼者ヨハネと同じように、イエスは社会の下層に属する困窮者に神の支配の現実気づくようにと活動を始められました。けれども、洗礼者ヨハネと違ってイエスは罪の赦しを宣言するよりは、当時の社会から罪人とみなされていた病人を癒すことで、神の愛が等しくその人に注が

れていることが社会的に認知できるようにしたのです。徴税人を弟子として自分の身近に置くことも、異邦人であるローマ人との交わる徴税人であっても、ユダヤ人と同じく一人の間とみなすように、イエスは周囲の人々に示していったのです。そしてそれは洗礼者ヨハネが「我々の父はアブラハムだ」と言って、民族的・宗教的純潔に対するユダヤ人の慢心に対して警告したのと同じように、ファリサイ派の人たちがエルサレム神殿を介さずに、障害を持っていて人の罪を赦すイエスの言動に対して異を唱えたように、イエスは自身の立ち居振る舞いが神の愛が現実を支配していることを具体的に表したのです。「我々の父はアブラハムだ」と言ってしまふ精神構造は、自分がイスラエル民族の末裔であることだけを根拠にして、自分がアブラハムの神への信仰を継承していると思ひ込むことは、エルサレム神殿での犠牲祭儀によって自分の罪を犠牲の動物に擦り付けて、自分の罪は赦されたと安心して神に対峙するような精神構造は、神の愛が信仰者個人に注がれていることに逆に気づかせない危険性があるのです。

本日のヨハネ福音書3章22節以下によると、イエスは弟子たちと一緒にユダヤ地方に滞在して、人々に洗礼を授けていたのですが、洗礼者ヨハネはまだ投獄されていないと24節にあります。ところが、イエスはヨハネが投獄されたことがきっかけで、公の宣教活動を始めたのです。そこにはイエスがヨハネの悔い改めの信仰では、今の現実の世界に神の愛を注がれていることを人々が受け止めることができないことの危機意識があったことを表しています。それは同時に、神の愛によって罪を赦して生かされていることを、時の権力者が快く思わないという事実をも明らかにしているのです。確かに、ヨハネが言うように、悔い改めなければ、神の愛に気づくことはないでしょう。けれども、「我々の父はアブラハムだ」と言って、神がイスラエルの民と契約を結んだ歴史的な事実を根拠にして、自分たちが神に罪赦された者としての恵みに浴していると考えてしまうことになる、現実の生活で自分自身の罪がどこにあるかという内省を促すことにはなりません。自分自身の罪を内省することは、時の権力者に対しても厳しい目を向けることになるのです。ですから、時の権力者の側から見ると、「我々の父はアブラハムだ」と自分自身の罪を内省しない生き方を民衆が選んでいた方が都合がいいのです。

私たちは、イエスが教えてくださったように、現実の生活の中では、信仰によって罪赦されて生かされています。罪赦されて生かされていることを、イエスが十字架によって私たち一人ひとりに確かなものとしてくださったのです。自分の罪を自覚する者は、イエスが教えてくださったように隣人愛に生きる者となっていきます。この世において自分だけの考えを最優先して生きるのが、自分らしく生きることだと思ひ込んでいる限り、この隣人愛の戒めの本当の意味はいつまでたってもわからないでしょう。自分中心で生きている限り、他人は自分の意志を阻害する存在でしかありません。同じように、神が私たち一人ひとりになしている御業も、自分の意志と食い違ってしまうならば、それを排除してしまうことを何のこだわりもなく行ってしまおうでしょう。そのように自分の意志を阻害する者を自分の周りから排除していく生き方は、いずれ神の御旨を考えることがなくなってしまうのです。ヨハネはイエスの先駆者として、それまでのイスラエルの伝統的な信仰理解では終末の時に神に受け入れられない事実を指摘しました。ところがイエスは神の愛が自分が生きている現実の世界に届いていることに気づくようにと宣教活動をされたのです。そして最後は弟子たちの無理解の中で十字架にかかり、神が死人の中から蘇らせることによって、神の愛を私たちに確かなこととして、身をもって知らしめたのです。このイエスの愛に応えて生きていきましょう。